なにかに傷つき、悩み、
その場に立ち止まったまま動けずにいる人が、
半歩でいいから歩き出せる力になりたい、
そう強く思う。

―柚月裕子「あしたの君へ」より

家裁調査官とは

家事事件や少年事件を扱う家庭裁判所においては、法律的な解決を図るだけではなく、事件の背後にある人間関係や環境を考慮した解決を目指しています。そのため、家裁調査官は、例えば、夫婦関係の問題で紛争になっている当事者や事件を起こした少年に会い、紛争の原因や少年が非行に至った動機、当事者や少年の生活環境等について調査します。調査した結果は、報告書にまとめ、家裁調査官としての意見を付した上で、裁判官等に報告します。

※家裁調査官になるためには、家裁調査官補として採用された後、裁判所職員総合研修所に入所し、約２年間の研修を受ける必要があります。

裁判所　採用
Facebook

本対談のほか、様々な動画を配信しております。是非ご覧ください。

特別対談

作　家　×　家裁調査官

「あしたの家裁調査官へ」

最高裁判所

言葉の背景に何があるのか、
想像すること。
それは作家と家裁調査官に
通じるところですね。

言葉にならないことを受け止め、
一緒に悩み、考え続けること。
そこに難しさとやりがいがあります。

撮影場所　仙台家庭裁判所

作家　柚月（ゆづき）裕子（ゆうこ）

2008年「臨床真理」で第7回「このミステリーがすごい！」大賞を受賞しデビュー。
2013年「検事の本懐」で第15回大藪春彦賞を受賞。
2016年「孤狼の血」で第69回日本推理作家協会賞（長編及び連作短編集部門）を受賞、2018年に同作品は映画化され、続編も決定。
2016年「あしたの君へ」で家裁調査官補を主人公に描く。
2018年「盤上の向日葵」で本屋大賞第２位を受賞。
大の猫好き。

家裁調査官　益田（ますだ）浄子（きよこ）

1998年４月に松江家庭裁判所で家裁調査官補として採用。
福岡家庭裁判所飯塚支部家裁調査官、
大阪家庭裁判所主任家裁調査官、
裁判所職員総合研修所家裁調査官研修部教官、
最高裁判所事務総局家庭局第三課課長補佐などを歴任。
大の小説好き。
お笑いも好き。

様々なミステリー小説を執筆されている作家・柚月裕子さん。著書「あしたの君へ」では家裁調査官補を題材にしています。作家から見た家裁調査官の仕事の魅力とは何か、現役の家裁調査官と語っていただきました。

―「あしたの君へ」執筆のきっかけ

益田　家裁調査官補を題材にした小説を書かれたきっかけは何だったんですか。

柚月　刑事事件を小説の題材にすることが多かったんですが、より身近な家庭の問題を扱うのは誰なんだろうと思って調べているうちに家裁調査官のことを知って、関心を持ったのがきっかけです。

益田　どんなイメージを持ちましたか。

柚月　**考えていた以上に、人の人生に深く関わっている**なと。とてもやりがいがある仕事だけど、難しいというか。

益田　ミステリーの分野で活躍されている作家さんが家裁調査官補の本を書かれたことに驚きました。どのような思いで執筆されたのですか。

柚月　私の中では、読者の方にこの先どうなるんだろうって思わせる謎があるのがミステリーだと思っているんです。主人公のカンポちゃん（家裁調査官補）がこの先どうなるのか、彼が担当した方々がこの先どの方向に半歩踏み出していくのか、読者の方はそこに関心を持たれているので、最後は、なるほどって納得していただけるような作品を目指しました。

―言葉にならないことを「想像する」

益田　柚月さんの作品は、心の動きや、言葉にならない何かをすごく丁寧に表現されていますよね。

柚月　私は、なぜその事件が起きたのかとか、その人の生い立ちなど、事件の背景にすごく関心があって、そこはいつも心を砕いて書いています。

益田　そこはまさに家裁調査官の仕事と似ていますね。起きたことだけではなく、その背景にあることや、**言葉にしきれていないことを考える仕事**ですし、それが跳ね返って、自分自身の価値観とか、生き方を問われ直すというところに、面白みも難しさも織り交ざっていると思います。

柚月　**作家と家裁調査官は「想像する」という点で非常に似ていますね**。小説を書く時は繰り返し想像しながら、ストーリーを組み立て、キャラクターを動かします。職業柄、**人の言葉の背景に何があるのか**は、常に意識しますね。家裁調査官も、問題を抱えた方とお会いしたときに色々と想像をめぐらせますよね。

益田　そうですね。「盤上の向日葵」も拝読しましたが、主人公の桂介が、小さい時に、優しくしてくれるおじさんではなく、お父さんから飴玉をもらって「ありがとう」と言いながら、見たこともない表情を見せるシーンは本当に胸にぐっときました。仕事をする中で、まさにそういう場面に出会うことがあるんです。

柚月　親って子どもにとっては絶対的な存在で、一番愛してもらいたい存在だと思うんですよね。他の人からどんなによくしてもらっても、親がしてくれたほんの小さなことが、子どもにとって幸せな場合ってあるんですよね。桂介ならきっと、そうだろうなと思って書いたシーンです。

益田　辛い体験をしながらも、やっぱりお父さんやお母さんを言葉にできない何かで求めるお子さんはいますね。そういった目に見えない心の動きを文字にするのは非常に難しいと思うんですが。

柚月　日々思い悩むところですね。私は映画を観たり、胸に届くなぁと思った小説を読み続けたりすることが必要だと思います。それと、自分の今考えていることを素直に見つめること。今の感情を言葉にするなら、どのような感じかなとか。日々勉強です。

益田　家裁調査官の仕事って思っていたより「書く」部分があるんですけど、報告書を作るときは、面接した方々を思い出しながら、どの言葉だと伝わるかなって考えています。私も辞典で調べたりするんですけど、この表現なら心に届くかな、こんな風に書いたら気落ちしちゃうかなとか想像しながら一語一語を丁寧に選ぶように心がけています。私も相手に伝わる表現を探して日々勉強ですね。

―今の職業を選んだきっかけ

柚月　益田さんが家裁調査官になろうと思ったきっかけは何だったんですか。

益田　大学の少年法のゼミで家裁調査官のことを知ったことがきっかけでした。

柚月　なぜ少年法のゼミを選んだのですか。

益田　自分が育った環境ですかね。友達の中には悪いことをする子もいたんですが、私からすれば普通の子で。だからそういう子が、なぜそんなことをするんだろうということに興味がありました。柚月さんは、なぜ作家という仕事を選んだのですか。

柚月　私は昔から本を読むのが大好きで。デビューする約3年前に取材原稿を書くお手伝いをしたんです。自分の書いた原稿がそのまま印刷されて書店に並んでいるのを見たときはものすごくうれしかったですね。そのうち自分の気持ちを文章にしたいなって思って、昔から好きだった小説ならそれを表現できるかなと思って書き始めたのがきっかけです。

―頼れる仲間の存在

益田　柚月さんは、どのようにして作品をつくりあげるんですか。

柚月　私は担当編集者の方と二人三脚です。たくさんの方のお力があって作品になるので、私の名前は代表者みたいなものです。

益田　「チーム柚月」ですか。

柚月　**「柚月組」**かな（笑）。家裁調査官はどうですか。

益田　今ので言うなら**「チーム家裁」**ですね。家裁調査官だけではなく、裁判官や書記官、様々な職種の方とチーム一体となってやっている感じです。

柚月　じゃあ、職場の雰囲気は和気あいあいとした感じですか。

益田　世の中の裁判所のイメージとは全然違いますよ。**堅苦しい感じはない**です。今日ご覧いただいた仙台家裁の職場の雰囲気のとおりです（笑）。

柚月　確かに（笑）。裁判所って聞くと笑ってはいけないのかなぐらいの堅いイメージを持っている方が多いと思うので、それを聞くとほっとしますね。

―仕事をする上で大切なこと

益田　家裁調査官の仕事をする上で大切なことは、私の中では3つあって、1つめは、**目の前にいる人を大切な存在だと考えて**、敬意をもって接すること、2つめは、**とことん悩んで考え続けること**、3つめは、**曖昧さに耐えること**。

柚月　曖昧さに耐える？

益田　わからないこと、答えが出ないことって結構しんどいことで、そういう局面に立つと、もうこっちでいいやって終わりにしちゃうことがあると思うんです。でも、家裁調査官の場合は目の前の方が、何が答えかわからない状況や、答えが出ない場面に、まさにいらっしゃるので、それに耐える、一緒に悩めることがとても大事なことだと思います。

柚月　それは考えつかなかったですね。確かに、人はこっちに行こうって決めるまでが非常に思い悩むときですよね。そこで投げやりにならずに耐える。私には**新鮮な言葉ですね**。

益田　作家に向いているのはどんな人ですか。

柚月　根気強い人。あと、**しつこい人**（笑）。

益田　柚月さんご自身はどうですか。

柚月　やはりしつこいところでしょうか。これでいいや、ということはなかなかできませんね。日常生活においてもそうですが、作品についても、**納得いくまで考えて、できる限り直したり、調べたりする**ことを心がけています。

―家裁調査官の仕事のやりがい

益田　面接では、目の前にいる少年や当事者の方の言葉にならないことや、感情の揺れ動きを受け止めながら、少しでも前を向けるように、この先をどうしたいかっていう認識を共有して、面接を終えることを大事にしています。**一緒に悩み、考えながらやっているところに難しさとともに、奥深さ、やりがいを感じますね**。

柚月　問題を抱えていた子どもさんが会いに来たりすることはありますか。

益田　結構あります。担当した少年が親子で進学の報告に来てくれたりとか。面接では見たことのない笑顔を見せてくれました。

柚月　それはすごく安心しますね。

益田　嬉しいですね。あの時の笑顔は今も忘れないです。でも同時に、まだまだ未来があるので、この先もがんばって歩んでいってほしいなとも思いました。

柚月　わかる気がします。誰かが笑っている姿って私もとても好きです。**人と向き合う仕事**って大変ですけど、**生きていく上で前向きになれるヒントも見つかる仕事**じゃないかなと。家裁調査官だって、自分の人生で思い悩むこともありますよね。そんなとき、あんなに辛い思いをした人が笑って過ごしていると思うと、勇気をもらえる仕事でもあるのかなと思っています。

―「あしたの家裁調査官へ」

柚月　肩書きだけでその仕事をしている方を想像するのは難しいと思うんです。小説を書いているのは一人の人間である作家だし、事件に向きあっているのは一人の人間である家裁調査官であるし、肩書きや**記号ではなく、気持ちを持っている一人の人間が仕事をしている**ということをもっと多くの方に知ってほしいですね。

益田　記号ではない、家裁調査官という仕事。なんか素敵なフレーズですね。

柚月　人って生まれ落ちたときから肩書きがあって、誰かの子どもとか、誰かの夫、何とかちゃんのお母さん、会社だと役職とか。でも**人って誰でも「本当の自分」というものを持っていて、そこを大切にすることは、相手を尊重することにつながる**なと。私はそれを大切にしながら、人と向き合っていきたいなと思います。

益田　周りから「優秀な子」と言われる少年を担当したんですが、後日手紙をもらいまして。手紙には、その少年が事件のことを誰にも、信頼していた人にさえ話せなかった、でも家裁調査官と色々話して、自分の中でも整理ができて、家裁の門から出て行くときには「久しぶりに世界が色づいて見えました。そんな気持ちになれてよかったです。」って書いてあったんです。嬉しさと同時に、誰にも話せない辛さは私の想像以上だったんだな、もっと何か自分にできたのではないかと思いました。「優秀な子」とかではなく、**一人の人として向き合い、接することの大切さ**を痛感しましたね。

柚月　**誰だって悩みを抱えて、誰かの助けが必要なときが人生にはあります**。そのとき距離が近い人にはなかなか話せない、**距離があるからこそ偽りなく本音を言える、そんな場所がとても大切**だと思うんです。そうした人の助けになってくれる、その一つに家裁という場所があってほしいなと思います。

益田　家裁調査官は、その方の人生の中の重要な場面で、それこそ近しい人にさえ話せないようなことも深く掘り下げて話を聞かせてもらい、一緒に悩んでいく。**本当に貴重な経験を、それを仕事としてやらせてもらうことの喜び**を感じます。

柚月　作家と家裁調査官が似ていることがわかりましたが、益田さんはこれから作家を目指す気は？（笑）。

益田　いけますかね？

柚月　もちろん大丈夫ですが、益田さんをこっちにお誘いすると、困る方がたくさんいると思うので、これからも悩んでる方のお力になってください。

益田　ありがとうございます。